中日本の木材・木材加工・木材利用など活動紹介

個性的な仕事を通じたネットワーク

中日本キノマチサミット

中日本キノマチサミット（発起人＝大西功起アーティストリー取締役）が6月25～27日、愛知県岡崎市、同豊田市、同弥富市、同春日井市、名古屋市などで開催された。

1日目は、岡崎市で森と街をつなぐ「もりまち」の取り組みを行ったほか、豊田市では建築家の坂茂氏が設計したタマディック豊田オフィス「Mobius Park」を訪問した。

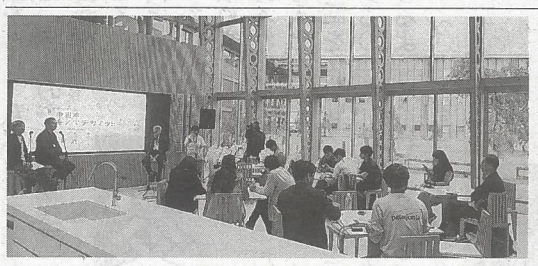
2日目は、弥富市では世界中の大径木丸太を製材するヤトミ製材を、春日井市ではアーティストリーが手掛ける5軸CNC加工、3DCADなどを視察した。

3日目は、名古屋市内の木質化ビルを巡り、設計と産業のつながりを読み解く試みも行った。

各日の夕方にはオンラインでのトークイベントも開催し、1日目は長野麻子モリアゲ代表を司会に、木質化ビルを建てたタマディックの森實敏彦社長、ビルの内装木質化に取り組む三交不動産の奥西哲也氏、全木連の本郷浩二副会長らが参加。

「木造化、木質化の意義、課題、可能性」について討論した。タマディックは、名古屋でCLTを型枠に使用したRC造ながらCLT型枠を意匠的にも使用したビルを建設し、その後豊田市で2棟目も建設した。森實氏は「木のビルを建てたことによる宣伝効果に加え、普通にビルを建てたら知り合えなかったような知り合うことができた」と評価した。

奥西氏は出社満足度の向上を掲げ、名古屋に建設したビルでは木質内装化した公開空地をつくり、容積率の緩和を受けられたことを紹介した。



奥から長野氏、本郷副会長、森實社長、奥西氏（タマディック豊田オフィスで）

2日目のトークイベントでは「森と向き合う多様な製材の世界」をテーマに、ヤトミ製材の加藤圭一郎専務、nojimoku営業部の野地麻貴氏、森庄銘木産業の森本達郎専務、フルタニランバーの古谷隆明社長がそれぞれの会社について語った。

ヤトミ製材は、直径2・5×14㍍までの丸太を製材できる工場があり、社寺から山車の車輪などここでしか挽けない唯一無二の製材を行っている。

nojimokuは、熊野材という節が少なく大径木が多い産地での商品開発という形で、桧板にスリットを入れて小幅板風にしたものや焼き杉ブームにあやかり、桧の節あり材を鉄焙煎で仕上げた「クロカベヒノキ」などの開発したことを紹介した。

森庄銘木産業は、奈良県での磨き丸太を生産するなかで森林所有者を施主にして山の木を調査しながら建築の設計にかかわった事例を紹介した。

フルタニランバーは「木の価値を届ける企業」として取り組んでいることを紹介した。

小学校からこだわり約30年

さんもく工業　田中陽裕社長

わたしの推し事　料理

昨年11月にさんもく工業（岡山市）の社長に就任した田中陽裕氏。小学生の時から台所に立ち、料理歴は30年以上の腕前。社長に就いた現在も休日は家族に手料理を振る舞っている。

田中社長が、料理を始めたのは小学校4年生。母親が病気になったのを機に、3人兄弟の長男として台所に立ち始めた。6年生から本格的な調理にのめり込み、カレーライスとみそ汁にこだわり、平日は母親、休日は田中社長が料理していたという。

最初は、カレーライスもさまざまなルーをブレンドし、具材にもこだわっていた。だが、今は「どこでも手に入る食材でいかにおいしく作ることができるかだ」という。スーパーで手に入り冷蔵庫にある食材を活用する。シンプルな材料だからこそ、おいしく作ることが難しくなる。

忙しい社長行をこなすなかでも家族に料理を振る舞う

現在、特にこだわっているのがチャーハン。具材は卵とハムのみで、調味料も塩コショウにごま油、隠し味は鶏ガラスープ。ハンバーグもひき肉とタマネギで、粉状のコンソメで下味を付け、余分な油を飛ばすため蒸し焼きにする。家族から焼き鳥の要望があった時は、ねぎまやつくね、皮など約50本を串打ちしたこともあった。母親直伝のエビの春巻きなどレパートリーは多彩。

「おいしいと言ってもらえるのがうれしいが、何より作る工程が楽しい」とストレス解消にもつなげている。社長就任後も自宅に居る休日は料理を作る。5月の大型連休も手料理を家族に毎日振る舞った。

社長に就任して約7カ月。プレカット加工については「業界は厳しい状況。だが、当社は指定工場のため安定している」と話す。

木製電柱や枕木の製造の山陰木材防腐が木材防腐加工業を開始し、兄弟会社の山陽木材防腐（現・ザイエンス）とともに成長した。歴史を振り返り、「創業以来、これまでさまざまな縁を通して会社が大きくなった。技術力と品質はあるのでこれまでの縁を大事にしてつないでいきたい」と話している。

効率的・持続的な維持管理を

民有林林道の全国調査結果まとめる

森林総研

森林総合研究所（茨城県つくば市）の研究グループは、民有林林道の維持管理に関する現状と課題を明らかにするため、統計データなど各種データの分析などに加え、市町村林道担当者へのアンケート調査（回答数726自治体、回収率58・3％）や関係者へのインタビュー調査などを実施し、その成果を公表した。

課題として浮かび上がったのは「人手不足」「予算不足」「データ未整備」。特に人手不足では、民有林林道は主に市町村が管理する責務を有しているなか、市町村の林道担当者の多くは他業務と兼務しており、実質的に市町村の約9割が1人未満の体制だった。限られた人員で、広範囲に分散する民有林林道を十分に管理するのは難しい状況にある。

一方、これまで実際の民有林林道の維持管理作業（除草や軽度な補修など）は、市町村担当職員だけでなく林業事業体や沿線住民など多様な主体が支えてきた。だが、人口減や高齢化により、この継続が難しくなっている。

多い回答があった。これは山村自治体だけでなく、都市近郊市町村や合併市町村でも同様で、限られた予算と人員のなかで、効率的かつ持続的な維持管理が求められている。

林道のデータ不足も深刻なことが分かった。開設から年月が経過し、管理主体でも起点終点など現地の正確な位置が分からなくなっている林道も存在する。効率的な維持管理の実施には林道台帳を電子化し、GISと連携することが有効だが、アンケート回答の4分の1の市町村（186自治体）は紙で管理しており、GISとの連携は5％にとどまった。

一方、先進的な取り組みでは、沿線住民による維持管理作業が困難になった路線を森林組合や建設業者、ボランティアなどが代替する事例や、都道府県が市町村の管理する林道データをデジタル化支援する取り組みなどがあった。

これらの解決に向けては、GISと連携したデータ整備による維持管理の効率化や補修・点検の優先順位付け、外部主体との連携による担い手確保が有効で、行政や民間事業者らによる技術的支援、予算的支援、先進事例の普及が必要と示した。

暑中お見舞い申し上げます
順不同

素材生産、造林、木材流通、山林・原木買取
木質バイオマス燃料用チップ製造
一般廃棄物収集運搬、浄化槽保守点検管理
AKITA SDGs
HORIKAWA
HORIKAWA FORESTRY
株式会社 堀川林業
代表取締役社長　堀川義貴
本社
〒014-1201
秋田県仙北市田沢湖生保内字下高野61
TEL 0187-46-2041　FAX 0187-46-2270
田沢湖工場
〒014-1204
秋田県仙北市田沢湖田沢字天狗森119
TEL/FAX 0187-42-2560

原木市場 立木伐採 林地開発
埼玉林材市場株式会社
代表取締役社長　上山裕久
〒357-0013 埼玉県飯能市芦苅場776-1
電話(042)974−1717㈹　FAX(042)972−4330　Email info@sairin.co.jp